



东亚语言研究论丛
EAST ASIA
LANGUAGES STUDIES

認知的意味研究

许永兰 著

现代日语『切割』类动词的 认知语义研究（日文版）

現代日本語における「切断・分離」を表す動詞の



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



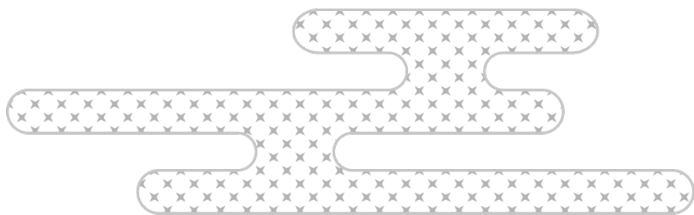
东亚语言研究论丛
EAST ASIA
LANGUAGES STUDIES

现代日语『切割』类动词的 认知语义研究

许永兰 著



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



内容提要

本书是研究有关日语动词语义学的一本专著。研究对象主要为现代日语中表示“切割”意的7个动词「キル」「キレル」「キラス」「ワル」「ワレル」「サク」「サケル」。本书以认知语言学语义观为理论背景,吸收日语多义词与自他对应研究的重要成果,应用并发展百科知识语义观与力动态模型,系统揭示了各动词的多义性以及自他对应机制。本书可为日语工作者了解日语“切割”类动词的语义,系统、深入地进行语义研究提供参考。

图书在版编目(CIP)数据

现代日语“切割”类动词的认知语义研究:日文版/
许永兰著. —上海:上海交通大学出版社,2020
ISBN 978-7-313-23303-5

I. ①现… II. ①许… III. ①日语—动词—语义—研究—日文 IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2020)第 094479 号

现代日语“切割”类动词的认知语义研究(日文版)

XIANDAI RIYU “QIEGE”LEI DONGCI DE RENZHI YUYI YANJIU(RI WEN BAN)

著 者:许永兰

出版发行:上海交通大学出版社

邮政编码:200030

印 制:当纳利(上海)信息技术有限公司

开 本:710 mm×1000 mm 1/16

字 数:302千字

版 次:2020年8月第1版

书 号:ISBN 978-7-313-23303-5

定 价:58.00元

地 址:上海市番禺路951号

电 话:021-64071208

经 销:全国新华书店

印 张:18.25

印 次:2020年8月第1次印刷

版权所有 侵权必究

告读者:如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话:021-31011198

前 言

本书的研究对象是现代日语中表示“切割”意的7个动词「キル」「キレル」「キラス」「ワル」「ワレル」「サク」「サケル」。

本书的研究目的是对上述研究对象进行语义分析与描写。

本书的研究内容分为两部分：一是进行多义分析与描写，二是进行动词的自他对应分析与描写。这两部分的研究内容并非相互独立，许多多义动词之间具有自他对应关系，而自他对应不仅是形态与句法的对应，更是语义的对应。因此，研究此类动词的语义，必然需弄清多义以及与自他对应之间的语义关联。目前国内外鲜有日语“切割”类动词的系统语义研究，且鲜有涉及多义与自他对应之间的互联关系。（第1章）

本书的研究理论背景为认知语言学的语义观，即认为语义是人的认知能力的反应，并强调百科知识语义的重要性。（第2章）

本书的研究方法有两方面：首先在多义分析方面，其次在自他对应分析方面。在多义分析方面，确定多义分析的课题为认定义项与揭示义项关系，前者借鉴“关联词不同”的标准，后者创新性地认定百科知识语义，并采用比喻、主体化的观点。在自他对应分析方面，发展了认知语言学的力动态模型，以此揭示多义词的自他对应成立条件。（第3章）

本书以上述研究理论与方法，论述了7个“切割”类动词的多义性以及自他对应之间的互联关系，从日语“切割”类动词角度，实例论证了认知语言学的语义观，尤其是百科知识语义、力动态模型的妥当性与有效性。（第4章至第6章）

本书具有如下特点：

1. 针对性、系统性。本书针对日语动词的多义性以及自他对应研究，全面探讨和吸收了以往重要的研究成果，对日语“切割”类动词中最具基础性与复杂

性的7个动词实施了系统的语义分析与描写。

2. 前沿性、创新性。本书的研究理论背景与研究方法,探讨和吸收了前沿的认知语言学语义观与理论工具,并创新性地将其不够深入的部分(例如,百科知识语义观与力动态模型)应用到本研究中予以了验证与修正。

3. 理论与实践相结合,应用性强。本书继承与发展了认知语言学理论,以日语“切割”类动词进行实证研究,研究步骤明晰,可应用于其他日语动词以及其他词类的语义研究,实用操作性强。

本书基于笔者日本留学期间提交的博士论文修订而成。在博士论文完成过程中得到了各方人士的大力支持,借此机会,表达由衷的敬意与谢意。

感谢我的博士生导师日本名古屋大学教授(现日本南山大学教授)粕山洋介先生。导师的严谨治学、诲人不倦、严慈相济、细心关怀,促成我如期完成博士论文,并顺利通过答辩。导师的课程和论文指导,使我逐渐领会语义研究的魅力与深奥,使我义无反顾地挑战日语语义研究,并决定投身到语言研究与教学事业当中。

感谢我的硕士生导师日本名古屋大学教授古田香织女士。古田香织教授是我踏入语言学门槛的引路人,并为我继续深入研究认知语义学提供了契机与帮助。在硕士毕业后仍一如既往地给予我学业与生活上的关怀。

感谢日本名古屋大学教授鹿岛央先生、李泽熊先生在我论文答辩中给予我的指导与帮助。李泽熊教授自我入名古屋大学以来,作为学长、老师,提供了宝贵的建议与帮助。

感谢日本名古屋大学留学时的学友。尤其是山田幸一博士、梶川克哉博士、加藤惠梨博士、木村みよ老师等,他们对我关于博士论文内容的疑问热心解答、共同探讨,从日语例句的判断到博士论文的语言表达,均给予了宝贵意见。

同样感谢我的朋友柴田纯子,同事山田高志郎、阿弓义树。他们也对我博士论文中的语料及论点提出了宝贵意见。

感谢我的朋友刘卉、金银珠和曲丹在我撰写博士论文过程中给予我精神以及物质方面的关心与支持。

最后感谢我的母亲与妹妹。在长达十多年的留学生活中,他们的理解与关爱是支持我完成博士论文的强大精神动力。

由于水平所限,书中舛误,在所难免。本书如有点滴可取之处,应当首先归功于恩师粕山洋介教授的指导,所有不足,概由笔者负责。

表記法

- 1) 例文の文頭、または分析対象語句の前に付された「*」は、その表現が非文であることを示す。「?」は、その表現が非文ではないが、容認度が低いことを示し、「??」はその表現がさらに容認度が低いことを示す。
- 2) 例文が新聞、小説などからの引用の場合、その出典を例文の後ろの()内に示す。インターネット上で公開されているウェブページ(検索エンジンGoogle)からの引用の場合は、()内にURLを明記する。出典の付していない例文は筆者による作例である。なお、筆者は日本語母語話者ではないため、各例文は、日本語母語話者のチェックを受けた上で論文に掲載した。
- 3) 例文には、各章ごとの通し番号を付してあるが、既に示した例文と同じ例文を再び示す場合は、例文後の()内に等号で初出の例文番号を挙げて、その例文が既出であることを示す。
- 4) 例文中に施した下線は特に断らない限り、引用者によるものである。例文中、直接の分析対象となっている箇所は実線の下線____で示し、それ以外の問題となる箇所は点線の下線.....で示す。
- 5) 同一文中で、複数の語句(AとB)が置き換え可能である場合、{A/(B)}のように示す。また、その例文が引用例である場合には、括弧なしの語句が、元の引用例の語句である。
- 6) 引用文中、引用者によって省略した箇所は、〔中略〕または〔以下省略〕などと示す。
- 7) 「 」で括られた言語表現は、それが問題となっている言語表現であることを示す。また、〈 〉で括られた言語表現は、意味あるいは意味を構成

する要素(意味特徴)であることを示す。なお、〈 〉の中に()がある場合は、それが補足、あるいは、「または」という意味で1月いうれる要素であることを示す。

- 8) 英文の引用後に()付きで日本語訳が示されている場合、特に断りのない場合は筆者によるものである。
- 9) 図表番号は、各章ごとの通し番号を付してある。
- 10) 注は、各ページごとに通し番号を付し、各ページ末に挙げる。

目 次

第 1 章	序論	001
1.1	研究の対象	001
1.2	研究の目的	003
1.3	研究の意義	009
第 2 章	理論的背景	011
2.1	認知(能力)の反映としての意味	012
2.1.1	カテゴリー化	012
2.1.2	同じ物事に対する異なる捉え方	014
2.2	百科事典的意味	017
第 3 章	研究の方法	022
3.1	多義語の分析方法	022
3.1.1	多義語分析の課題	022
3.1.2	多義的別義の認定基準	024
3.1.3	多義的別義の相互関係について	028
3.2	自他対応の分析方法	034
3.2.1	自動詞、他動詞、自他対応とは	034
3.2.2	自他対応の成立条件	040

第4章 「キル」、「キレル」、「キラス」	051
4.1 「キル」の多義分析	051
4.1.1 先行研究の検討	051
4.1.2 分析	053
4.1.3 まとめ	087
4.2 「キレル」の多義分析	090
4.2.1 先行研究の検討	090
4.2.2 分析	094
4.2.3 まとめ	125
4.3 「キラス」の多義分析	128
4.3.1 先行研究の検討	128
4.3.2 分析	130
4.3.3 まとめ	142
4.4 「キル」、「キレル」、「キラス」の自他対応	143
4.4.1 「キル」、「キレル」、「キラス」の自他対応の 様相	143
4.4.2 「キル」、「キレル」、「キラス」における自他 対応の成立条件	151
4.4.3 まとめ	167
第5章 「ワル」と「ワレル」	170
5.1 「ワル」の多義分析	170
5.1.1 先行研究の検討	170
5.1.2 分析	172
5.1.3 まとめ	190
5.2 「ワレル」の多義分析	192
5.2.1 先行研究の検討	192
5.2.2 分析	195
5.2.3 まとめ	213

5.3 「ワル」と「ワレル」の自他対応	215
5.3.1 「ワル」と「ワレル」の自他対応の様相	215
5.3.2 「ワル」と「ワレル」における自他対応の成立条件	218
5.3.3 まとめ	226
第6章 「サク」と「サケル」	228
6.1 「サク」の多義分析	228
6.1.1 先行研究の検討	228
6.1.2 分析	230
6.1.3 まとめ	245
6.2 「サケル」の多義分析	247
6.2.1 先行研究の検討	247
6.2.2 分析	248
6.2.3 まとめ	257
6.3 「サク」と「サケル」の自他対応	258
6.3.1 「サク」と「サケル」の自他対応の様相	259
6.3.2 「サク」と「サケル」における自他対応の成立条件	261
6.3.3 まとめ	268
結論	270
参考文献	273
索引	278

序 論

本書は、日本語の動詞の意味について考えようとするものである。そのため、いくつかの動詞を取り上げ、その意味をどのように考えたらよいのか、また、どのように記述したらよいのかを探求するものである。以下、1.1.節では、本書が取り上げる研究の対象について述べる。次に、1.2.節では、本書が達成しようとする研究の目的について述べる。最後に、1.3.節では、本書の研究の意義について述べる。

1.1 研究の対象

本書の考察対象は、(1)にあげられた7つの動詞である。

- (1) 「キル」、「キレル」、「キラス」、「ワル」、「ワレル」、「サク」、「サケル」^①

① (1)にあげた7つの動詞のうち、「キル」、「ワル」、「サク」、「サケル」は、複数の漢字に対応することがある。

- (i) a. 「キル」：「切る」、「斬る」、「伐る」、「截る」、「剪る」、「鑽る」
b. 「ワル」：「割る」、「破る」
c. 「サク」：「裂く」、「割く」
d. 「サケル」：「裂ける」、「割ける」

漢字の表記と意味の対応について、初山(1994)では、「1つの音に複数の漢字表記があり、漢字表記の違いが意味の違いに関与しない現象」を認めているが、第4章以降の記述からわかるように、本書の考察対象についても同様の現象が認められる。以下、本書では、引用する場合を除き、(1)であげたカタカナでの表記を用いる。なお、本書は、本書の考察対象が複合語の(転下頁)

これらの動詞は、例えば、次のように用いられる。

- (2) 長ネギの一番外側の皮をむいて、白い部分を8等分に切る。長さ4〜6センチが目安。(朝日新聞(朝刊)2004年12月5日、聞蔵)
- (3) 岡田の原点は高校時代の新聞配達だ。〔中略〕冬場は紙の端で指が切れて血が出た。(朝日新聞(朝刊)2008年2月20日、聞蔵)
- (4) 特に冬は手にひびを切らし、そこから血がにじみました。(http://www45.tok2.com/home/kodemari/05/shiryu07.html)
- (5) 包丁で二つに割った越冬キャベツは、すきまがないほど葉がびっしりと詰まっていた。(中日新聞(朝刊)2006年1月28日、中日新聞・東京新聞記事データベース)
- (6) 爆撃された病院では、火災が発生し、半径五百メートルにわたって窓ガラスが粉々に割れ、病棟にいた多くの入院患者が死傷した。(中日新聞(夕刊)1988年3月1日、中日新聞・東京新聞記事データベース)
- (7) ホタテ貝柱は水気をふき、手で4つくらいに裂く。(朝日新聞(朝刊)1999年2月23日、聞蔵)
- (8) 午後8時ごろになって、大型車が橋を通過した時に、「ガキーン」という激しい音と共に柱が上下に裂けたという。生じたすき間は約4センチだった。(朝日新聞(朝刊)2007年9月2日、聞蔵)

これらの例文の下線部で示された「8等分に切る」、「切れて血が出た」、「ひびを切らし、そこから血がにじみました」、「二つに割った」、「粉々に割れ」、「4つくらいに裂く」、「柱が上下に裂けたという。生じたすき間は約4センチ」という表現から、「キル」、「キレル」、「キラス」、「ワル」、「ワレル」、「サク」、「サケル」は、次の(9)のような共通した意味を表すと考えられる。

(接上頁)構成要素として用いられる場合、慣用句の中で用いられる用法、古語の用法は考察対象外とする。また、可能動詞としての「キレル」、「ワレル」、「サケル」の用法(「この刀はキレル」、「私には、この丸太がワレル」、「この包丁は、うなぎがサケル」)も、考察対象外とする。

- (9) 〈単一のものが2つ(以上)の部分になる、あるいは、単一のもののある部分に境界^①が生じる〉

本書では、(9)のような意味を表す動詞を仮に「切断・分離」を表す動詞と呼ぶこととする。

1.2 研究の目的

本書の目的は、「キル」、「キレル」、「キラス」、「ワル」、「ワレル」、「サク」、「サケル」という7つの「切断・分離」を表す動詞を考察対象とし、その意味を分析し記述することである。

この目的を実現するためには、少なくとも次の2つのことが問題となる。

- ① 本書の考察対象の各語は、同一の音形に、意味的関連を持つ複数の意味が結びついている。
- ② 本書の考察対象の7語は、形態を部分的に共有し、構文的、意味的対応を持つ場合がある。

まず、森田(1989)、馬場(2003、2009)、吉村(2003)、伊藤(2005)は、「キル」、「キレル」、「ワル」という3語について、①のことを認めている。そこでは、複数の意味の記述とともに複数の意味の間の関連性の明示が試みられている。このことは、「キル」、「キレル」、「ワル」を多義語として

① ここで言う「境界」とは、Langacker(2008: 137)を参考に、「対象を構成する物質からその物質の不在へと移行する地点」としておく。Langacker(2008: 137)は、境界(limit)について、boardの例をあげ、次のように述べている。

One aspect of conceptualizing a board, for example, resides in mental scanning serving to register the continuous extension of the material substance constituting it. The constitutive entities are patches of wood (indefinite in number and arbitrarily delimited). In scanning through them in any direction, we eventually reach a point at which this substance fails to be manifested. The limit (in any given direction) is defined by this point of contrast, where we detect a transition from wood to nonwood. (例えば、boardの概念化には、boardを構成する物質の広がり記録する役割があるメンタル・スキニングが関与する。boardは(無数の恣意的に区切られる)木片からなる。それをどの方向にスキャンしても、最終的には、この物質が存在しない地点に辿り着く。境界は、木材から非木材(nonwood)へと移行する対立地点で、(全方向の)範囲が定まる。)(碓井智子他訳(2011: 173))

みなして意味を記述していることであると考えられる。多義語とは、国広(1982: 97)によって、次のように定義されている。本書もこの定義に従う。

「多義語」(polysemic word)とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う。

なお、「意味的に何らかの関連」については朧山(2001)に従い、何らかの意味特徴を共有する場合だけでなく、メトニミー(3.1.3.節において定義する)に基づく場合も含める^①。

「キル」、「キレル」、「ワル」に関する先行研究の多義語としての意味記述は、参考となる部分も少なくないが、さらなる検討の余地もある。各語の複数の意味記述を検討していくと、それらは、言語事実を十分に捉えているとは言えず、意味が類似している他の語との共通点、相違点も明らかではない。また、複数の意味の間の関連性は、不十分な意味記述に基づいて記述されているため、さらなる検討が必要となる^②。なお、先行研究では、「キル」、「キレル」、「ワル」以外の本書の考察対象については、国語辞典^③などにおいて、1つの見出し語の下に、複数の意味を羅列するに留まっている。複数の意味が複数の見出し語の下ではなく、1つの見出し語の下に記述されているということは、それを多義語としてみなしていると考えられるが、複数の意味の関連性については明示されていず、また、複数の意味の記述においてもさらなる検討の余地がある。以上から、本書は、「キル」、「キレル」、「キラス」、「ワル」、「ワレル」、「サク」、「サケル」の意味を記述するのに際し、先行研究に従って多義語と考え、多義語としての意味記述を行うことになる。

次に、本書の目的を実現する上で考慮すべき2つ目の問題として、本書の考察対象は、形態を部分的に共有し、構文的、意味的にも対応する場合があ

① 多義語と関連する概念として、同音異義語と単義語(の文脈の変容)がある。三者の違い及び連続性については、国広(1982, 1986)、朧山(1993, 2001)、朧山・深田(2003)を参照のこと。

② 詳しくは、4.1.1節、4.2.1節、5.1.1節での各語の先行研究に対する検討部分を参照のこと。

③ 参照した辞典類は、以下のとおりである。

『広辞苑』(第六版)、『小学館 新日本語辞典』、『大辞林』(第三版)、『デジタル大辞泉』、『日本語基本動詞用法辞典』、『日本語表現活用辞典』、『明鏡国語辞典』(第二版)

るということである。まず、形態を部分的に共有する状況を確認しよう。

- (10) a. 「キル」 (/kir-u/)、 「キレル」 (/kir-e-ru/)、 「キラス」 (/kir-as-u/)
→/kir-/
b. 「ワル」 (/war-u/)、 「ワレル」 (/war-e-ru/)
→/war-/
c. 「サク」 (/sak-u/)、 「サケル」 (/sak-e-ru/)
→/sak-/
(11) a. 「キル」 (/kir-u/)、 「ワル」 (/war-u/)、 「サク」 (/sak-u/)
→/-u/
b. 「キレル」 (/kir-e-ru/)、 「ワレル」 (/war-e-ru/)、 「サケル」
(/sak-e-ru/)
→/-e-ru/
c. 「キラス」 (/kir-as-u/)

まず、(10)を見ると、「キル」、「キレル」、「キラス」は、形態的に /kir-/という部分を共有し、「ワル」と「ワレル」は、/war-/という部分、「サク」と「サケル」は、/sak-/という部分を共有する。次に、(11)を見ると、「キル」、「ワル」、「サク」は、/-u/の部分を共有し、「キレル」、「ワレル」、「サケル」は、/-e-ru/の部分を共有する。「キラス」の/-as-u/の部分は、他の語と共有されていない。

次に、7語の構文的、意味的対応関係を見てみよう。次の例文を見てみたい。

- (12) a. 岡田の原点は高校時代の新聞配達だ。〔中略〕冬場は紙の端で指を切って血が出た。(=(3)を一部改変)
b. 岡田の原点は高校時代の新聞配達だ。〔中略〕冬場は紙の端で指が切れて血が出た。(=(3))
(13) a. 「あのね、下駄の鼻緒を切らしちゃったの。お願いだから、上げてね。〔以下省略〕」(太宰治『チャンス』、青空文庫)

- b. 「あのね、下駄の鼻緒が切れちゃったの。お願いだから、すげ
てね。〔以下省略〕」((13)aを一部改変)
- (14) a. 同署は何者かが外から石を投げつけて窓ガラスを割ったとみ
て、器物損壊容疑で調べている。(朝日新聞(朝刊)2010年10月
5日、聞蔵)
- b. 同署は何者かが外から石を投げつけて窓ガラスが割れたとみ
て、器物損壊容疑で調べている。((14)aを一部改変)
- (15) a. 布を裂く音が、静かなアトリエ周辺に響きわたります。
(<http://aiirogumi.blog115.fc2.com/blog-entry-116.html>)
- b. 布が裂ける音が、静かなアトリエ周辺に響きわたります。
((15)aを一部改変)

例文(12)から(15)において、各例文のaにおける「指を切って」、「鼻緒を
切らしちゃった」、「窓ガラスを割った」、「布を裂く」という表現は、bに
おいて、それぞれ「指が切れて」、「鼻緒が切れちゃった」、「窓ガラスが
割れた」、「布が裂ける」という表現と対応している。この場合、助詞
「を」と共起する名詞(句)が助詞「が」と共起する名詞(句)と共通している
ことがわかる。このことは、次のように示すことができる。

- (16) a. Nを {キル/キラス/ワル/サク}。
b. Nが {キレル/ワレル/サケル}。

このことから、本書の考察対象は、(16)のような構文的対応関係を持つ場
合があることがわかる。さらに、「キル」、「キラス」、「ワル」、「サ
ク」は、(16)aの構文で用いられ、〈分離するという状態変化を引き起こ
す〉という意味を表し、「キレル」、「ワレル」、「サケル」は、(16)bの構
文で用いられ、〈分離するという状態変化が生じる〉という意味を表す。こ
のことから、本書の考察対象は、意味的対応関係も持つ場合があることがわ
かる。ただ、ここで注意すべきことは、「キル」と「キラス」という2つの動
詞が「キレル」という1つの動詞と、上で述べた形態的、構文的、意味的対
応を持つことである。

このように、動詞が形態を部分的に共有し、構文的、意味的対応を持つ現象は、従来、自動詞と他動詞の対応^①という観点で考察されている(早津(1987a, b, 1989a, b)、沼田(1989)、佐藤(2000, 2005)、影山(1996, 2000, 2001)、鷺尾・三原(1997)、須賀(2000)、中村(2000))。これらの研究では、形態を部分的に共有しながらも、構文的、意味的対応を持つ場合と持たない場合があるという現象に注目している。この現象は、本書の考察対象においても同様に認められる。

- (17) a. * 特に冬は手にひびを切り、そこから血がにじみました。((4)を一部改変)
 b. 特に冬は手にひびが切れ、そこから血がにじみました。((4)を一部改変)
 c. 特に冬は手にひびを切らし、そこから血がにじみました。
 (= (4))
- (18) a. * 「小泉首相が進めようとしている改革を評価しますか。評価しませんか」との質問への回答を支持政党別にみると、「評価する」が最も多かったのは自民支持層だが、それでも64%だった。〔中略〕無党派層では「評価する」が31%、「評価しない」が34%、「その他・答えない」が35%と意見を大きく三つに割った。((18)bを一部改変)
 b. 「小泉首相が進めようとしている改革を評価しますか。評価しませんか」との質問への回答を支持政党別にみると、「評価する」が最も多かったのは自民支持層だが、それでも64%だった。〔中略〕無党派層では「評価する」が31%、「評価しない」が34%、「その他・答えない」が35%と意見が大きく三つに割れた。(朝日新聞(朝刊)2003年11月5日、聞蔵)
- (19) a. フランスW杯で日本はアルゼンチン、クロアチアにいずれも

① 本書は、自動詞と他動詞の対応について、先行研究に従い、「自他対応」という用語で示す場合もある。なお、先行研究によっては、自他対応と同じ内容のものを自他交替という用語で表す場合もある(影山(2000, 2001)、中村(2000))。本書は、鷺尾・三原(1997)、影山(2000, 2001)を踏まえ、「自他対応」と「自他交替」を同じ現象を指し示すものとみなして議論を進める。